

令和3年度東京都広報コンクール 映像部門 総評

阿部委員

この一年も、各市区町村のご担当者様におかれましては、コロナ対応や、オリンピックパラリンピックの開催と、いつにもまして人々に対する様々な広報でお忙しいなか、コンクールへのご応募をいただき、ありがとうございました。

なかにはコロナワクチンの接種案内を工夫した作品や、オリパラのイベント中止に伴う自治体の対応を描いた作品もありました。そして、今年は、多くの動画のレベルが高く、優劣をつけるのがとても難しかったです。単純な点数計算では同点ばかりで、高橋審査員や東京都の担当の方達と話し合い、この入賞を決定したほどです。

最優秀の足立区の作品は、藤林さんの3歳の娘さん冬夏ちゃんと、お父さんの手話の風景がとても素敵でした。頭ではわかっていたつもり「手話」を、とても人間らしい愛おしい「言葉」として見せてくれました。

一席の清瀬市は、素晴らしく上質なインタビュー。澄川喜一氏の、清瀬への思いや豊かな人間性に引き込まれました。取材前の入念な準備と、構成力あつての賜物なので、作り手の手腕をととても感じた作品でした。

二席の、文京区は、戦災にあった一人ひとりの出来事をとても丁寧に描いており、区の反戦や平和祈願への思いや眼差しがひしひしと伝わってきました。

荒川区の、つまみかんざし職人石田氏の記録。小さな布の表情が指先やピンセットで変わる工程のひとつひとつに圧倒されました。

奨励賞の二つも、その作り方がとてもユニークでした。

墨田区の、小学生に墨田水族館の広報を作らせ、その過程を通して墨田区そのものの広報に仕上げていく構造がとても新しかったですし、

台東区が、バケツ稲クラブの活動に参加した家族の喜怒哀楽に数ヶ月密着した映像そのもので、台東区の区民との繋がりを感じる、とても暖かい気持ちになる作品でした。

また、選外にはなりましたが、福生市の、保育士さん一人ひとりに対してや、稲城市の、蕎麦店主や梨農家等市民一人ひとりに対しての、優しい眼差しも、本当に素晴らしい地域だなぁ、と感じましたし、何より、武蔵野市のTikTokを使った若者へのコロナワクチン接種動画は個人的にはチャレンジ大賞をあげたいくらいでした(笑)。他にも国立市や調布市の、手作り動画も、今後もどんどん市民目線の動画を「自主制作」して欲しいと思いました。

「広報」は英語で「Public Relation」。広く報せることで、地域の人々と、いかにいい「関係」を作れたか、そんな観点で、いつも採点させていただいています。今年もたくさんの方の自治体とそこに暮らす人々の素敵な関係を見せていただきました。ありがとうございました。

高橋委員

2021年度の広報コンクール（映像部門）に応募された全ての番組を拝見しましたので、

「総評」させていただきます。

2021年になっても世界はパンデミック一色でした…

日本国内でも殆どの競技が無観客という制約にもかかわらず、一年延期になった東京2020オリンピック・パラリンピックはそのまま開催され、その直後に第5波と呼ばれる新型コロナ・デルタ株の感染者数はピークを記録してしまいました。そして、年後半になるとその第5波と呼ばれる感染の波は急激に収まったように見え、静かな年の瀬を迎えたのです。それが一転、2022年に入るとまたまた新たなオミクロン株なる新種の大流行で東京都でも感染者は一日一万人を大きく超え増加の一途を示しています。

このような特異な時代背景で、一体「広報」というものは何をしたら良いのか、果たす役割や在り方を根源的に問われているような気がした一年でした。本来ならばこのコンクールでも、題材としては何年も前から準備されてきた東京オリンピック・パラリンピックが、盛大かつ華やかに開催され、世界中のアスリートの活躍を称え、国や都のそしてホストタウンになった各区市町の運営の労をねぎらう番組が並んでいたことだと思います。しかし、それは今回十分には適いませんでした。

今回の出品された25の番組を視聴して感じたのですが、新型コロナのことを全く意識していない区市町は無かったと思います。担当者は広報として、このコロナ禍の中でどの番組を応募させればよいかと悩まれたことと思います。そして、出た結論は「まだコロナは終わってないんだ！」ということでした。それ故、敢えてコロナには全く触れない番組を選定された区市町も多かったのです。地域ごとのコロナ対策情報を現在進行形のこの時期に出しても未だ総括もされておらず、それは直ぐに上書きされ過去の情報として陳腐化することは避けられません。広報担当者としては悩みどころだったと思います。

今回の中身に関して少し具体的に述べます。25番組をごく大雑把に分けてみると「ワクチン接種情報に特化したもの」3件、「地域のオリンピック・パラリンピックへの取り組み

総括」4件、「伝統文化・地域の歴史紹介」7件、「手話・障害者関連」4件、その他7件という結果でした。

技術的にはどの番組（動画）もかなり高度なレベルを保っており、ひと頃の微笑ましい素人っぽさが目立つような番組は見当たらなくなりました。あとは各地域、番組がどのようなテーマでつくられるかという企画力の問題です。幅広いテーマの選択肢の中で「人間」ドキュメンタリーで深掘りしてもよし、親しみやすい情報性豊かな番組でもよし、です。

ここからは私見です。私はまず「ワクチン接種情報」は情報として当然大事なのですが、先にも述べた通り状況によってどんどん上書きされていく性格のものであり、当映像コンクールに出品するには若干そぐわないのではないかと思います。

それから毎回一番出品作が多く、安定路線とも言える「伝統文化・地域紹介」ですが、コロナ禍中の不安定な心情の世の中で、逆にホッと暖かい落ち着いた気分させられました。そして今回私が注目したのは「手話・障害者関連」の4件です。一つはろう者という聴覚に障害がある人たちのサポートに立ち上がった人々と障害をもった人々との交流を主に描いています。もう一つは地域のブラインドサッカー、通称「ブラサカ」のチーム応援番組です。手話のことで言えば、今年のアメリカのアカデミー賞候補になっている「コーダ - 愛のうた -」も手話が繋ぐ人々の輪を描く物語で、いま手話が世界的にも注目されているテーマだと分かります。私は番組中の「手話は言語である」という言葉が特に印象に残りました。東京2020パラリンピック開催をきっかけに日本でも障害をもつ人々への一層の理解促進と交流を促す番組がこれからも期待されています。その他の番組もいろいろ秀作がありました。地域のパブリックアート紹介、保育士養成への取り組み、小学生のバケツ稲クラブ、文化勲章受章者インタビュー等々、それぞれ制作者の熱意が伝わってきて十分に魅せられました。

2022年、関係各位もくれぐれも健康に留意されるようお願いとともに、今年こそは世界で新型コロナウイルスが終息することを心から念じて止みません。